

E-12 地方都市平地農村の高齢者の居住形態（その1）

岐阜女大家政 中野迪代

目的 高齢者の居住形態を考へる際、同居か別居かという問題の中には、種々の要素が隠されている。本研究では地方都市平地農村をとりあげ、老若夫婦の同居という形が維持されている中での高齢者の生活実態を明らかにし、その背景にある問題を探り、農村の高齢者の居住形態を考へる。本報告は主に、その生活実態について述べる。

方法 三重県多気郡明和町の三部落の65才以上の高齢者のいる全世帯のうち、留守、拒否を除いた29世帯34人に生活時間表、生活の各実態（経済、健康、日常生活、仕事精神面）及び住居の概略と家族の就寝の場所等について聞き取り調査を行った。

結果 生活実態の概略を把握することが出来た。居住形態としては、同棟同居15世帯、敷地内別棟同居13世帯（老人室一母屋4、井戸長屋5、門長屋3、離れ新築1）敷地内半別居1世帯である。希望としても現状肯定である。配偶者のある場合は、なるべく若夫婦から離れる傾向があり、配偶者がないと、男は全て同棟である。女の場合は、元気なうちは別棟の傾向がある。65才以上の高齢者と体の悪い人は同棟になるが、女の場合は嫁との折合いの悪さから別棟がみられる。半別居の1世帯はその極たる例である。調査対象者には体に故障のある者が多いが、皆よく働く。専業→1兼→2兼になる程高齢者の労力は重視され、野良仕事に比重がかかる。しかし、経済的裏付けはなく、収入は老齢福祉年金のみの者が多い。昼間一人でいる者が12名もあり、高血圧、心臓病の持病持ちも多く、ほとんど孤獨同様で淋しさを訴える者もある。これらの人々は同居のため、社会的施策の外にあり、何らかの対策を必要としている。